

らる。翁は平素端嚴、溫讓、然も稜々たる俠骨を有せり。翁又川上冬崖に就きて洋畫を學び、曾て英照皇太后の御肖像を描き奉りし事あり。花鳥山水何れも其技精妙に達せるが、殊に孔雀は得意とせし所なり。嗣子十畝氏能く翁の衣鉢を傳へて令名あり。門下又池上秀畝、廣瀬東畝等、幾多の逸足を輩出せり。

⑤ 襟章制定

これについては「至明治四十四年一月 教務内規、諸規定書類教務掛」に次のように記録されている。

生徒制服へ襟章附著ノ件揭示案何

生徒一般

自今本校各分科生徒ノ識別ヲ容易ナラシムル爲生徒制服上衣ノ左

記

(採用シタルモノ)



各科襟章

(揭示案添付文書より。)

襟端ニ別記文字ノ襟章ヲ附著スヘシ

但シ本襟章ノ販賣ハ本校出入商人静一堂ニ之ヲ許可セリ

大正四年九月 日 本校

右文書欄外に「九月十一日学年始ヨリ実施」という記入と羽田(禎之進)の捺印がある。

⑥ 矢代幸雄の起用

岩村透の辞職(正式な辞職は大正五年四月七日休職満期の時点である。)に伴い、正木直彦校長は大正四年九月十日付で矢代幸雄を囑託として起用した。矢代は明治二十三年生まれで大正四年七月に東京帝国大学文科大英文学科を卒業し、大学院に入学したばかりの青年であった。正木は『回顧七十年』(昭和十二年。学校美術協会出版部)の中で矢代の起用について、

大正の初め、美術學校で英語の教師を求めて居つた時、一高校長の瀬戸虎記君から、

『丁度、今年帝大英文科を出たので、矢代幸雄といふのがある。これは銀時計組で、かなりの俊才であるから、必ず役に立つだろうと思ふ。一つ使つて見て貰ひたい。』

と云つて來た。本人に會つて話して見ると、

『私は大學へ行つて居り乍ら、太平洋畫會へ行つて繪を習つたり、又彫刻もやつたりしてゐました。専門は英文學ですが、行く／＼は美術史家と云ふものになりたひ考へです。だから、美術學校へ英語で使つて貰へたら便宜が多くて結構だと思ひます。』